
牢愁の焼跡

ceryeti

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牢愁の焼跡

【Nコード】

N0922Q

【作者名】

c e r y e t i

【あらすじ】

海沿いの工業地帯には打ち捨てられた廃ビルが立ち並んでいる。人の姿が消えた集合住宅、複合ビル、事務所。降り積もる年月は、そのかつての時代の空気をビルの中に澱ませ、暗く閉じ込めている。その中のひとつ、人実会館。

喫茶店、美容室から病院まで備えた複合施設として多くの人でにぎわった昭和の中層ビル。しかしそこは45年前に起きた火災で5階から上が全焼し、廃館となった。

上層は焼けただれたまま、下層は食堂の食器や病院の機材など打

ち捨てられたままに、ビルから人が去った。次第に周囲の建物からも人の姿が消えていった。

時は流れ、かつてのにぎわいの跡には荒涼たる廃墟だけが佇んでいる。

人がいないはずの建物からは、夜な夜な笑い声がきこえ、窓には人影が浮かぶと言われる淋しく、冷たい廃墟群。

かつて起きた猟奇殺人の真相。

焼身自殺を遂げた女の伝説。

そして当時の人々の悲喜交々の人間模様。

これは、そこに立ち入った肝試しの学生たちの、一夜の物語。

第1話（前書き）

にほんブログ村

ceryetiです。

作者名は架空の人物です。

廃墟を舞台にした短編です。

忘れ去られる記憶をテーマに幽霊を出しながらまた切ないものを書きたいです。

タグ不穏ですがあれはなんとなくです。

読んでいただけたら幸いに思います。

第1話

「牢愁の焼跡」

黒木 瑞枝 作

> i 1 6 5 2 5 — 1 9 8 5 <

国道に車を走らせ、ひとつ道を外れると工業地帯に出た。

緩衝緑地の木々の向こうに林立する多様な鉄の尖塔の群れ。そこから吐き出される炎と煙が、暗い夜空に無機質な光を投げかけている。

「なあ峻次、もうすぐなんじゃないか？」

後部座席に座っていた早川智が言った。それに運転手の江藤峻次が応じる。

「ああ、もう工場が見えるよここまで来たしな。先輩どうです、もうすぐ着きますかね？」

「もうすぐね。けどまだだわ。着きそうになったら言うから」

先輩と呼ばれた助手席に座る沢木峯子が、カーナビを見ながら答えた。そのカーナビはのぞいてみても特に目的地も経路も設定されていない。先輩は同時に携帯と道路地図をひざの上に広げてカーナビと交互に見比べている。

「峯子先輩、本当にそれらしいところに来ましたが、目的の建物はまだ先なんですか？ 廃墟だったらほら、もうちらほらと見えますが……」

「智さん、待ちきれないのはわかるけど後ろでぐずぐず言わないでちょうだい。今とびきりの場所に連れてってあげるから」

この人の言うとびきりの場所ってどんなところだろう……。想像すると怖くなってくる。

「先輩、恐れながら、連れてきてるのはオレなんですけどね」

隣でハンドルを握る峻次が口をとがらせるが、先輩はカーナビと

地図に集中したまま峻次に言葉を返そうとしない。無視したようだ。その峻次は峻次で、自分は無視されたんだとわかって食い下がろうともせず、何事もなかったように運転を続けるのはすごいと思うが……。

「なんだか寂しいところに来たね」

智の隣に座っていた三掘好美が外を見ながら不意にぼつりと言った。さつきから静かだったから眠っているのかと思った。

「ああそうだな。少し道を外れただけなのにな」

市街地の真ん中を通る明るい国道を海の方へ外れ、間にある高台を越えた先のさびれた旧道を四人を乗せた車が進んでいく。左手には工場地帯と市街地を隔てる丘の斜面が、右手には緩衝林と工場群が続く。道沿いには商店やガソリンスタンド、民家、ビルなどの建物が立ち並んでいるが明かりがつかっていない。どれもみな、人の入っていない廃墟のようだった。

建物が暗ければ道も暗い。見上げると工場の光が雲と煙に当たって、空は暗い赤に染められている。

夕焼けのように鮮やかな赤ではない。暗闇の鈍い赤に染まる空は、さながらそれ全体が錆びてしまったかのようだ。

本当にさびしいところだ。どうしてこんなさびれた場所にやってきたのか……。

今日、ちょうど四人が一緒に受けた試験を最後に、前期の授業が全て終わった。いよいよ夏休みということで、智は峻次と先輩に誘われるまま、好美も加えて学校近くのファミレスで夕食をとった。そこで先輩が廃墟で肝試しをしようとして出し抜けに提案したのに峻次が考え無しに乗ったのだ。

先輩は四人の所属する遊びサークル、オカルト研究会の活動の環だと言うし、ノリと勢いだけが原動力の峻次は話に食いついてしまつて離れない、怖がりのはずの好美までもがめずらしく行ってみたいと言うので、智は仕方なくついてきたのだった。

「ねえ智さん、あなたの好美さんは怖いって言ってるのに、もっと

ましな言葉をかけてあげられないのかしら？二人でせっかく後ろに座ってるのにちっともいちゃつこうとしないんだから。さつきからミラーで見てるのにつまらないわね」

「いや、つまらないってなにがですか？それにいちゃつくってどういうことですか？ていうか先輩ミラーなんて見てないじゃないですか？ついでに言うとなんたのってなんです、あなたのは？」

ひとつの会話でこんなにつっこみどころがあるとは……。それもまだあるような気がするから怖くなる。

先輩は不敵な笑みを浮かべながら相変わらずカーナビと地図の両方とにらめっこをしている。時折携帯もチェックするのだから器用なものだ。

口が達者な先輩にはいつもこうしてからかわれる。好美とは同郷で昔から互いによく知っているが、急にいちゃつけと言われても困る。

「好美、眠いのか？」

「あ、うん。ごめん、昨日徹夜で勉強したから。総詰めこみ……」

好美は口を押さえてあくびをこらえた。

「じゃあ着いたら起こすから今のうちに寝ておけよ。目的地にはまだ着かないみたいだからさ」

「うん……」

好美はいかにも眠そうに目をこすっている。

「ねえ先輩、もう通り過ぎちゃったんじゃないですか？ほら、川が見えてきた」

峻次の言うとおり、人気のない家並みを抜けると古い橋に出た。

「うーん、川まで来ちゃったか……。江藤、ちよつとそこで曲がって川沿いで停めてくれる？あなたの言うとおり、通り過ぎたみたい」「アイサー」

峻次は慣れた手つきで川沿いの細い路地に車を滑り込ませる。少し進んだところで止めると先輩と峻次はすぐに車を出た。

ボタンと音を立ててドアが閉められるが、隣の好美はまだ起きず

に静かに寝息をたてている。続いて智も音を立てないようにして車から出た。

海の方から吹く風が川面を渡ってくる。日中が暑かっただけに気持ちのいい海風だ。横では先輩と峻次が方々を指差しながら、ああでもないこうでもないと言い合っている。

「あら智さん、なかなか出てこないから、眠ってる好美さんになにかしてるんじゃないかと心配したわ」

出てくる智を見るなり先輩が芝居がかった口調で言った。

「ああもう、疲れるからなにもつつこみませんけど、峯子先輩、先輩は一体なにがお望みなんです？オレたち肝試しに来たんですよね？」

「先輩は、肝試しで怖くなった三掘さんが、キヤー智くん助けて！って腕にしがみつくシチュを見たいと仰せだ。ついでに言うところでおまえが、オレがいるから平気だよ、と言えとなお良いと言っておられる」

この二人はいつものことだがつつこみどころが多すぎる。いちいち付き合っていると身がもたないから要点を突いていかないといけない。ない。

「そういう芝居は峻次、おまえひとりやってる。峯子先輩、それが目的なら先輩は峻次にでもしがみついてもらうんですね」

「ところで江藤、一度通り過ぎちゃったけど、目的の場所、やっぱりあれよ」

華麗なスルーだ。この人は話の切り替えも早いのだった。軽口はワンタッチで済ませて先輩はもと来た方向を指差している。峻次もよく順応したもので、即座にハイと召使いのような返事をして話を聞いている。

「あの大きなボーリングのピンが上に立ってるのですかね」

川沿いで少し高くなっているここからなら、来た道の様子がよく見える。二人の見る方向を眺めると、光のない雑多な建物の向こうに白いボーリングのピンが目に入った。色のない廃墟の間でひと際

白く目立つそれを頂く建物は、ここから見ても四角形の黒い影にか
か見えないが、どこか異様で、不気味な重厚感をその黒い躯体に湛
えているように感じられる。

「ええあれね。旧人実会館、想像以上に見事な廃墟ね。以外と目立
つのに見落としたみたい。下ばかり見てたせいだわ」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0922q/>

牢愁の焼跡

2011年1月10日21時55分発行